861
80
1

関東を主とする酒造関係資料雑纂

後年酒理言

七八

七十八

後魚酒理言

全

國立圖書館
昭和 24. 3. 29
寄贈

酒呑ていつしかおもて錦にしつゝ玉の盃を始めのみをぬかなみ
長命丸薬ともいはるゝ酒なれハ呑てたのしみ世乃中の
世乃う記を忘るゝため乃酒なれハのんでもまた一盃の法
極楽ハ酒黄金蛇ハ酒無量体何二升そや
菊見の頃まても何のいとみなく酒ときいてハ嬉き三升し
法薬ハ喜いなれハかなふまし酒計りハ昼夜いるまい
あいさつへ見えみとむり酒を一つすゝめるも楽みなり
呑れも人も喜ぶる若酒飲ねで呑ておもしろし三升
身の徳を集べての酒なれども来上も御遊もあり
陶淵明李白らふに呑るハ未の世までも名を残し八升
たゞ夜すがらあつれす縁いしく呑へ上元を始め升といふ
大酒を呑人まても酒呑といはずに呑り一升
芳賀茶録
中元ふ日彩もられて村雨の名残りすゞしまゝこの下戸録

帝國圖書館藏

後無酒理言

序

八雲立いつも家酒哉ふより八岐蛇おく出て家てえれと
うつ酔しとて更てきへ神まきての本御酒を飲く流の肉井し
うい子ア、飲ハ我もひ枝を哉すくし玉将も身子志を
くと冬の夜れ家てし持られぬ床の内月ハさへつきる雲
夜の月おと法わかのハ鳥の声と嵐の音もかをあくび
をお息家ま色乃此次を祝て当て述懐哉ま白られ
康乃も手を任世後世酒理云と題せ

糀室酒人素面著

于時天明三癸卯

きのふまて酒と月とを華ふより八雲と濁り月の朔日

鳴呼時なるかし天変ま然かれかゝき飢饉の妖媚ハ
数日の雨に降うつされ流まされとも穂にも出ず皆変
諸くの稲のさかりに咲て花も苞迷ハ實生もせず媚
穂ハ天を飾て不屈錦もゝハ地に伏て吹秋戦ぎして水
ませり雪も田の面に白妙の康牝子まゝ庭の康の葺も然
あはれなる葉月の頃ハ畦を変りて咲たら頭ハ等
盈を抱て愁る地に生するもの一つとして實るもの
なけれハ民家多く餓（ガ）ゆるものありうゝ葛の葉根
根をを取しは或ハ咲の藁（ワラ）或餅にして餓鬼遂（キ）形ハ
伏儀に似て身にハ木の葉をまとひて食れを志のげども
歯牝根も何となく鼻ハ歯或喰も然んて

○伏儀にてあはれぬ者牝葉衣ハ出て小歩ぞふて神農
猶何でうきハ春よの糧を何とかして取置し御身を仁君
是を然ひありここにとのり御下し是を救ハしめ給へハ

民家朝暮の煙りに賑ひ穏なり富に神代より始まり
ゆの世に至りたへさなるものハ竹乃葉に似せこに栄し酒林
往古薩蘆穂を包結ふて已（ヨリ）ヵ孫々の竹薮へ立寄
帰て竹乃切口へ入置しに笹乃葉此露志なりて落
かの稲穂を包て日を経て其キ香しき匂ひを生せし此
水を竹林此七賢乃内上戸と云人初メて是ヲ飲ハ饑
を志のぎ寒暑鬱邪を拂ふ其ハ功挙けてかぞふ難き
是を為乃水なりと云んまてさんすひに酉と云ふ字を
書て酒と讀ス笹の葉の露なるが故に笹の竹葉のと号

此世の薬酒ハ雨水なきときも此故なり酒しむへなるへし
酒此徳といもへ甚ましくて不老延日流るとも不絶只
其大徳の徳をいへハ酒ハ百薬の長にして神へ捧て神酒
と云夫婦の仲立となりさん〳〵くの盃ハ多交りまの席の
禊此鈴乃鴛鴦とも洞いゝの志らし朝風情も洞なり和
漢ともに重賞是をもてあそひ能ひ知ると年の飢饉も
まぬかれす酒法度の世となりぬれハ御代の竹の酒林を
引ぬかれ枝を施まさ幕と褒し竹ハ灰吹火吹竹割
て魚串菜箸となりしも誠に是ヵ不人のなさけなし

とやいはん雨なしよ雪を見れは季白も雪ふるをふて
寒空に素面ては雪も見られす寄て火燵て上ケ樽おて
詩ヲ賦ス

醒夜思

牀前肴下戸
疑是酒上ノ強（シイモ）
叩頭飲三杯
低頭思古饗

李白

陶淵明も酒なきは菊みてもうそさむく囲炉裏可
侯火して

○凶年と菊もいやなり酒法度醪（モロミ）おさ禄ハ頭巾さへなし

春の花見夏の涼ミ秋の月萩も紅葉も[illegible]雪も冬の
雪見も酒なくしてハ風ひいて人参呑て借銭の淵へはまる
浮ヶ首くゝるまでなりぬいやしき裏店住居の者も一
膳の菜も洒落ぬはまぬり乳を火燵にも敷着て蒲団
代よりも志みて寝なからおたゝぬ桝の徳利を見上
てハ涙なからにとまり行へを

○とくりを見れハ涙の備前焼なさけなかりし閨の燗さ

女房も抱拭なくて

○小町故気な徳利の通ひ酒よふ女ぬも呑れしま踊娘う

きめふ奴の居中も酒なけれハあり事なくうそのふく
はくもんと惣もきらつす日ならと始め数々ある
○一重なる下子共込の薬酒こそをだひあし酒ハ孫いく
旦那もにぎき数々ある
○法師なお里やらふ一寺も飲せねぞ世ふ中の友ミ継続ふせよ
隣屋の人も大形地芙蓉状掛まれども酒製なけ（ら）ねハ薬気も
絶ゆまゝまさら仲酒の喧嘩も中直りの仕やうもなし鮭の
さしミも酢てくふやうな有様なれ也
○湖ふまも酒にもお酒のかハりしに酢ても味噌でもいけぬ凶年

世界ハ又お母乃孫乃お乳のみてくらふ鰤（フリ）汁も糟もなけれハ
世ましてくらふ思ふ有様なれ也
○鉄砲乃薬なそていうるれまい三河の吉酒ハ巧ふてそ見れ
豆へまくもな酒なき世の見る酒屋の酒桶乃中にハ万
の糞とけちくむかり世中の酒せんハ地頭と代官間轄ハ
口銭おこぎて太平小盃の火入と愛し盃ハ子供の手遊び
となりぬ硯蓋ハ猫の茶碗となり古銅の三毛猫の糞下と成
思ふかんどくし乙ハ酒をもとさらせて嫁が毎夜の燗酒
の酒となれ親父ハ息子へ足らんの条々減り浮世家の

大法よれ経奉行も唐茶かなけれハ柏子木の名かぬけ
禅寺乃門まも「不許」葷とあかり書よふにあらぬされ共
若き学者毎夜寄合ての浮気咄しの後口さみしき酒なん
うハさのミいひちらし呑くさの集り酒のことをわすれし時に
俳諧式も発句相応なると題をもふけ優されたるから口小
出次第出来しだい首かきふけて東紙更し其名観川崇
てサア咲咄しく

△酒法度と云題で咄し　友梏（ユウリコ）

皆忘て居る通り天明三の末としも用意から雨も
傘ハテル名もなく降る風ハ枇杷のとばされ共雅
吹く國中ハ戸に不及金まても凶年て手形ハ大上り
破れ落あらぬされハむざんて酒ハ法度まあて上戸ハ
臭のみをもたれしごく是非なく已がこゝしなれハ
まけて梅とすれども瓢箪よ酒ハなし煙きらのなれ
ハひよんざりと風よ吹れて何座へ蔵ル媒ぞきて入ルぞあ
もなく種物を入て函当の棚よ飾て並へるしら風
見当り年来酒ちうきた所瓢箪なれハいまだ白も志
よふらと口の吸いて鼻よあつれハ中より黒きもの

大分也飲ミたれハ瓢箪から胡麻ヶ出る

酒なしの雪見　　常酔（じやうスイ）

○今とし降る雪ハさむひぞかたなとへ

述懐　　懐（クハイ）危（キ）

○歌ヶハ足ヶかひなをおおてあひす呑くさき冬の夕暮

又　　犬（ケン）悦（エツ）

○うしと見し砥石とさへなと見えし手鍋のなかも嬉しや渡世ん

△金銭捨て酒銭呑と云題ニ咄し

四五人集り咄次うちナニト甚助ヨ世の中ハ悪し

まいるし　酒ハ法談に高歌のすれハ世次（ジヤニヨツテ）おれハ

とれハ能くさうか有るナニト坊主ハ能くぞおれハ是から盗

せし追剥杯をせふと思ふコレハとんだ思付そのまゝ

なるまいさらまり付にかへるふサア其酒ちりつけら望ミナ

中ニも無醒生かも咄しハ発句も出来次是非なく

立てく棚の百人一首を云出し定家卿此歌あり

てくともし　しハ吟こけり

樽拝遍吐

○あ酒つまへ酒の通ひも吹とぢよ此神酒の浪花もしばしとゞめて

酒製法師

○今宵なといひしばかりに長月を来秋の酒ば待出侍る

三升有大尽

○名ま高き大坂山の酒とれハ人ま知られぬるしミもなし

水唯飲

○まさけのつれなく見へし別れ酒と盃斗うきものハなし

平酒盛

○忍れと色ま出まけり隠はな酒や呑ふと下戸のとふまで

酒（ヒエ）無（ナ）金（コン）熱（アツ）燗（カン）

○飲みての後の心まくらぶれハ下戸めハ物を思はざりけり

醒少無金

○日ばこめて年のそらねハ上るとも世ま大坂の内ハ出るさし

和泉酒氣部

○あらきらん大盃をとり出ま今一度の飲こともかな

酒無金朝腹

○呑ことのたへてしなくハ中砂（りミ）もこいさもみをも恨（ミ）さらまし

酒見

○恨ほどひろさの盃あるものをどぶにくちなん名こそおしけれ

酒大損銭分格

○諸白のあまれとも呑みぬれハ下戸より却て悦ハなし

三銭飲

○古ハ屋形にて呑てうき世に如此れハ悪し可酒盛さき甚の酒かい

大無金常飲

○夕されハかとの周膳ハおとつれて呑から呑り樽秋風そ吹く

酒内（サケノミニ）無金（ナニコ）銭臥（セスフス）

○言酒の其の上なもさらみり小首の座いたすもあるらん

須得飲

○百歩や行の新錫の思れバ枡あまり是酒切手なりけり

可飲ハ大呑くびア、年がつまるといつて来の三味線

綴まさきて言調子まて声たり上ケ

下戸なりこふしこうきめいせまい酒年

のある内てそぶが来るい无理なれでもぞふ

やら飲さい（ワニテニガア）し　あ里や　唄ハたさ

らむし　又明晩

跋

世于多く狂哥なとして世の盛衰をそしり人の

苦悪なるをいふを愚の甚しき事なりたとへは

虎を猫にそしり、龍を蛇為口縄に喩てそし
子八、酒乃なき事能のミ熱歎し、飢饉能
うれ忘須、益德も常ハ云ても忘る須、唯察
れ叔まゝに書記、其害をものゝふの曽て人の
為にもなる事又ふとものかいにもなき須、為も也れ
なれとも完賢人乃口ふれ

于時寛政七歳
乙卯二月吉日
楓麻衝山遊
写之

雲宗年代斗石負書

19954

1931

ガラス使用

861
80
1